萬葉集

おやとこ
ことおや
めをと

特261
6
20
25

始

特261
25

萬葉集

おやとこ
ことおや
めをと

目次

憶良等者……五
宇利波米婆……五
銀母……六
世人之貴慕……七
和可家禮婆……一二
布施於吉弖……一二
秋芽子乎……一三
客人之宿將爲野爾……一四
知智乃實乃……一四
丈夫者……一六
知知波波母……一七
美豆等利乃……一八
石見乃海……一九
石見乃也……二二
小竹之葉者……二三
天飛也……二四
秋山之……二八
黄葉之……二九
難波人……二九

欲見者……三〇
草枕此羈之氣爾……三一
麻等保久能……三二
大船爾……三二
君之由久海邊乃……三三
大船乎……三三
眞幸而……三四
和可禮奈婆……三四
和伎母故我……三五
和我由惠爾……三五
氷嶺經……三六
泉河……三七
清鏡……三八
馬替者……三八
天地之……三九
竊爾等……四一
吾背子之……四一
草枕客去君乎……四二
卜部乎毛……四四
吾背子者……四五

教へ子に

人の心が純で力のあつた頃叫ばれた歌の中後世まで殘る運命をもつたものは、どこか尊いものがあるといはなければなりません。

萬葉人は中天の月のやうに明るく、鳥の聲のやうに清らかで、秋の水のやうに透つてゐました。動くも止るも、往くも還るも、歌ふも踊るも、まことに朗かで、露はで、可愛いものでありました。

この萬葉人が吐き出した長息である萬葉集の歌は、稚拙なところはあつても率直で、天心流露で、可憐で、はりきつた力があり、人臭いものがなく、生れながらの清新さがあり、神ながらといふ感じがいたします。誠が躍り出してゐる自らな調べがあります。

みよしのの象山のまのこぬれにはここだもさわぐ鳥の聲かも
うちなびき春きたるらし山のまの遠きこぬれの咲きぬる見れば
春過ぎて夏來たるらし白たへの衣ほしたりあめの香來山

夕されば小倉の山になく鹿のこよひはなかずいねにけらしも

わがやどの冬木のうへにふる雪を梅の花かとうち見つるかも

足びきの山河のせのなるなべに弓月がたけに雲たちわたる

かうした日本の民族性が清らかに露出したものを見て行くことは、我々の魂の故郷に歸ることで、御製に仰せられました

ともすれば思はぬかたにうつるかな心すべきは心なりけり

このやうな我々の心をどんなに高く雅に、直く雄々しいものにすることでせう。

ことに上べに走り、末梢的になり勝ちな時には土に歸ることが大切であります。すべての源であり、生みの親である母、至純で、深眞、莊嚴な母を再認識しなければなりませぬ。魂の底からゆりあげる感激によつて全心を淨化し、全靈をして力强い躍進をさせなくてはなりませぬ。

今とりあへず、母の心の迸り出た歌と、親を思ふ子の心、妻を思ふ夫の心、夫を思ふ妻の心のあらはれた歌の中から幾つかを拔萃して、よみをつけ、平

易な解をして見ました。研究の途上にあるもののしたことですから誤がありましたらお直し下さい。

よいものを味讀し、諳誦するありがたさを知つてゐる者は、この本の中のものをもきつと心讀し、諳誦することでせう。

漢字のままで入れましたのは、何か研究上に都合のよいこともあるかと思ひましたし後から來る人の大きい力に賴みをかける心からでもありました。

解を加へない歌は比較的問題のないうたで、あなた方で適當に解をつけていただきたいと思つたのであります。

排列は、母の歌、子の歌、次に夫妻の歌といふ風にいたしましたが、何の意味もあるわけではありませぬ。

參考にしました本は、

萬葉集略解

萬葉集古義

萬葉集新考

萬葉集總索引
萬葉集選釋
等でありました。

山上臣憶良罷宴歌一首

憶良等者　今者將罷　子將哭　其彼母毛　吾乎將待曾

憶良らは　今はまからむ　子なくらむ　そのかの母も
あをまつらむぞ

思子等歌一首幷序

釋迦如來金口正說等思衆生如羅喉羅又說愛無過子至極大聖尙有愛子之心況
乎世間蒼生誰不愛子乎

宇利波米婆　胡藤母意母保由　久利波米婆　麻斯提斯農波
由　伊豆久欲利　枳多利斯物能曾　麻奈迦比爾　母等奈可
可利提　夜周伊斯奈佐農

うりはめば　こどもおもほゆ　くりはめば　ましてしぬ

ばゆ　いづくより　きたりしものぞ　まなかひにもさな
かゝりて　やすいしなさぬ

瓜をたべると、子供のことが思はれるし、栗をたべるとまして子供が思はれてならぬ。(一体)どうしてどこから來たのか、不思議な因緣で親となり、子となつた、その子の俤がどこからあらはれて來たのか、眼の先に、めつたにちらついてねてもよくねむられない。

反歌

銀母　金母玉母　奈爾世武爾　麻佐禮留多可良　古爾斯迦
米夜母

しろがねも　くがねも玉も　なにせむに　まされる寳
子にしかめやも

戀男子名古日歌三首

世人之　貴慕　七種之　寳毛我波何爲　我中能　產禮出有
白玉之　吾子古日者　明星之　開朝者　敷多倍乃　登許邊
佐良受　立禮杼毛　居禮杼毛登毛爾　戯禮　夕星乃　由布
幣爾奈禮婆　伊射禰余登　手乎多豆佐波里　父母毛　表者
奈佐我利　三枝之　中爾乎禰牟登　愛久　志我可多良倍婆
何時可毛　比等々奈理伊弖天　安志家口毛　與家久母見牟
登　大船乃　於毛比多能無爾　於毛波奴爾　横風乃　爾母
布敷可爾布敷可爾　覆來禮婆　世武須便乃　多杼伎乎之
良爾　志呂多倍乃　多須吉乎可氣　麻蘇鏡　弖爾登利毛知

弖　天神　阿布藝許比乃美　地祇　布之弖　額拜　可加艮
受毛　可賀利毛神乃　末爾麻仁等　立阿射里　我例乞能米
登　須臾毛　余家久波奈之爾　漸々　可多知都久保里　朝
朝伊布許登夜美　靈剋　伊乃知多延奴禮　立乎抒利　足須
里佐家婢　伏仰　武爾宇知奈氣吉　手爾持流　安我古登婆
之都　世間之道
よの人のたふとみねがふ七くさの寶もわれは何
せむに我が中の　うまれいでたる　白玉のあが子古
日は　あかぼしの　あくるあしたは　しきたへの床の
邊さらず　立てれども　居れども　ともにたはぶれ　夕

づつの夕べになれば　いざねよと　手をたづさはり
父母も　うへはなさかり　さきくさの　中にをねむと
うるはしく　しが語らへば　いつしかも　人となりいで
て　あしけくも　よけくも見むと　大船の　思ひたのむ
に　思はぬに　横しま風の　にはかにも　覆ひ來ぬれば
せむすべの　たどきをしらに　白たへの　たすきをか
け　まそかがみ　手にとりもちて　あまつ神　あふぎこ
ひのみ　くにつかみ　ふしてぬかづき　かからずも
かゝりも　神のまにまと　立ちあざり　われこひのめど
しましくも　よけくはなしに　やうやうに　形つくほ

り　朝なさな　いふことやみ　たまきはる　いのちたえ
ぬれ　立ちをごり　足すりさけび　ふしあふぎ　胸うち
なげき　手にもたる　あが子とばしつ　よのなかの道

世の人が貴み又欲しがる七寶も「白金も黄金も玉も何せむにまされる寶子にしかめやも」で子寶にました寶はない。その子寶が我にもさづかつて白玉のやうに可愛い我が子の古日は、朗らかな朝は床の上から立つたり居たりして父母に戯れ、靜かな夕べになると「さあやすみませう」と手をとつて「父さんも母さんも側にね、そして僕はそのまん中に寢るの」など、可愛らしいことをいふので、この子が早く大きくなつて、よいにつけ、わるいにつけ其生ひ先を見たいものだと樂しみにしてゐたのに、思ひがけなく、惡い風が突然と吹きつけて來て我子は病にふしてしまつた。どうしてよいのかせむすべもなくて、眞白い襷をかけ、立派な鏡を捧げて天神に禱り乞ひ、地神を伏し拜み、「今はもう全く神々にお願ひ

するより外はありませんどうぞお助け下さい」と取り亂してお願したけれど、一寸もよいこともなく段々と体は屈まり、一日々々とものをいはなくなつて、とう〳〵なくなつてしまつた。

殘念さにをどりあるき、口惜しさに足ずりをしてどなり、悲しさに天を仰ぎ地に俯し、胸をうつて歎いた。今の今まで大事に手にもつてゐた白玉の吾子をふつとどこかへとばして了つたのだ。

これが無常の世の中の道理とは知つてゐるがやはり悲しい。露の世は露の世ながらさりながらかゝらずもかゝりも神のまにま、…………と全く他力になつて行くのがこうした場合の人の心である。それをいしくも堀りあて、歌ひあげた憶良は矢張偉大ではありませんか。

又、手にもたる吾子とばしつ、世の中の道、の結びも大したものです。ほんにこの通りです。子をなくした親の心は、全くうつろになつて、何の力も、何の欲もなくなつてしまひます。そしていくら人が道をといてなぐさめてくれてもだめです。たゞ歎きです、たゞ悲しみです。この長

息が「…………世の中の道」であります。

反歌

和可家禮婆　道行之良士　末比波世武　之多敝乃使　於比
弖登保良世

若ければ　道行きしらじ　まひはせむ　下べの使　負ひ
て通らせ

まひはまひなひで賜りものです。下べは冥府のこと地獄極樂のことです。
賽の河原の地藏菩薩を拜む親心であります。

布施於吉弖　吾波許比能武　阿射無加受　多太爾率去弖
阿麻治思良之米

ふせおきて　あれはこひのむ　あざむかず　ただにゐゆ
きて　あまぢしらしめ

天平五年癸酉遣唐使舶發二難波一入海之時
親母贈レ子歌幷短歌

秋芽子乎　妻問鹿許曾　一子乎　持有跡五十戸　鹿兒自物
吾獨子之　草枕　客二師往者　竹珠乎　密貫垂　齋戸爾
木綿取四手而　忌日管　吾思吾子　眞好去有欲得

あきはぎを　つまごふかこそ　ひとりこを　もたりとい
へ　かこじもの　わがひとり子の　草枕　旅にしゆけば
竹玉を　しじにぬきたれ　齋瓮に　木綿とりしでて
いはひつつ　我がもふわが子　まさきくありこそ

反歌

客人之　宿將爲野爾　霜降者　吾子羽裏　天之鶴群

たびびとの　宿りせむぬに　しも降らば　あが子はぐくめ天のたづむら

遠く旅に出た人達が、寄り添うて宿つてゐる野原に白く霜が降りて來たならば、私の可愛い子供を羽の中に入れて守つて下さい。群れとんでゐる鶴たちよ。

遙かな旅の空を望んでゐる心が響をたててあらはれてゐる歌であります。一人子を旅に出して、出して了へば何と思つてもしようのない心が、ちの自分の身を忘れて其子を愛し守る鶴のことを思ひ出して、たよりかけ、よびかけたのでせう

慕振勇士之名歌一首幷短歌　大伴家持

知智乃實乃　父能美許等　波播蘇葉乃　母能美己等　於保呂可爾　情盡而思良牟　其子奈禮夜母　丈夫夜　無奈之久可在　梓弓　須惠布理於許之　投矢毛知　千尋射和多之　劍刀許思爾等理波伎　安之比奇能　八峰布美越　左之麻久流　情不障　後代乃　可多利都具倍久　名乎多都倍志母

ちちのみの　父のみこさ　ははそばの　母のみことおほろかに　心つくして思ふらむ　その子なれやも　ますらをや　むなしくあるべき　梓弓　末ふりおこし　なぐやもち　ちひろいわたし　つるぎたち　こしにとりはき　足びきの　やつをふみこえ　さしまくる　心さやらず　後の代の　語りつぐべく　名を立つべしも

力ある父君、愛深き母の君、お二方とも〴〵一方ならぬお心づくしを下

さる其の子であります。丈夫と生れてぐづ〳〵しては居られません。弓末をふり立てて強い矢を遠々まで射ぬき、劒刀を腰につけて重なる山々をふみこえて、大君がおつかはし下さる御心を心として何物にも障りなく突切る勇猛心もて、後代の人がほめそやす程の名をあげなくてはなりません。

父母を思ひ、家門を思ふ心でうたひ出して、それが大君の御心にそひまつることによつて安心が出來るところに入つて非常な力を現はしてゐるのを見のがさないやうにいたしませう。

反歌

丈夫者　名乎之立倍之　後代爾　聞繼人毛　可多里都具我禰

ますらをは　なをしたつべし　後の代に　きゝつぐ人も
かたりつぐがね

丈夫は後世にたゝへられる様な、ををしい名をたてなくてはなりません。

知知波波母　波奈爾母我毛夜　久佐麻久良　多妣波由久等
母　佐佐己弖由加牟

父母も花にもがもや草枕旅はゆくともささごて行かむ

佐野郡丈部黑當

丈部ははせつかべで走使ひにつかへた部民で、はせつかひべの意で杖部ともかきます。東國の人が之になつてゐました。安房、下野、遠江等の人々が見えてゐます。この歌も遠江のさや郡の人のものでありまして、大方郷里から京に召されて行く時の心でありませう。あのこひしい父母もこの今眼に見る花だつたらいゝがなあ、淋しい旅路を行くとしてもささげて行くのに…。親をこひしがる眞情がうれひになつて、行く旅の道すがら、そこにゐら〳〵とゐらぎ咲いてゐる白い花を見て父かと思ひ母の面かと感じ驚いて、やがてこの歌が成つたのでせう。親を親しみ思ふ心、尊みなつかしむ心がすうつと流れてゐます。

時々の花は咲けどもなにすれぞ母とふ花の咲きて來ずけむ　防人山
名部丈部眞麿、の樣なのも見へます。

○

美豆等利乃　多知能巳蘇佉爾　父母爾　毛能波須價爾弖
巳麻叙久夜志伎

水鳥のたちのいそぎに父母にものはずけにていまぞくや
しき　上丁有度部牛麿

丁、よぼろ、召されて朝廷の課役につかへた廿一歳から六十歳までの男子のことであつて、信濃の丁などといつてゐました。男丁、丁男、夫ともかきました。この歌は其の召しに郷山を出て行つた時のもので、家をでる時には出るもの、送るものの心さわぎ、心忙しさで遂父母にしんみりわかれの言葉もかけずに來た、そのことを道行くうちに心が靜かにさびしくなつて來るを思ひ出したのであります。そしてすまなく思つてゐるのであります。

柿本朝臣人麿從石見國別妻上來時歌二首
弁短歌

石見乃海　角乃浦囘乎　浦無等　人社見良目　滷無等　人
社見良目　能咲八師　浦者無友　縱畫屋師　滷者無鞆　鯨
魚取　海邊乎指而　和多豆乃　荒礒乃上爾　香青生　玉藻
息津藻　朝羽振　風社依米　夕羽振流　浪社來緣　浪之共
彼緣此依　玉藻成　依宿之妹乎　露霜乃　置而之來者　此
道乃　八十隈毎　萬段　顧爲騰　彌遠爾　里者放奴　益高
爾　山毛越來奴　夏草之　念之奈要而　志怒布良武　妹之
門將見　靡此山

石見のみ　つぬの浦みを　浦無と人こそ見らめ

潟無と人こそ見らめ
よしゑやし　浦はなけども
よしゑやし　潟はなけども
鯨魚取り　海邊をさして　渡津の　荒磯の上に
か青なる　玉藻　沖つ藻
朝はふる　風こそよらめ
夕はふる　浪こそ來よれ　浪のむた　彼よりかくより
玉藻なす　よりねし妹を　露霜の　置きてしくれば
この道の　八十隈毎に　萬たび　顧みすれど　彌遠に
里はさかりぬ

益高に　山もこえきぬ
夏草の　思ひしなへて　しぬぶらむ　妹が門見む　なびけこの山

石見の海の角の浦は、よい浦がない、よい浪がないと人はいふ樣である。(實際よい浦も潟もない。)なくてもよい、只一つ渡津がある。その渡津の荒磯の上には美しい澤山の藻が、朝ふく風によつてくるし、夕立つ浪にものつてくる。その浪のまに〳〵漂うてゐる藻のやうに、しなやかにより合つてゐた妻を、つれもなく置いてきたものだから、道々のまがりめ〳〵で度々見かへるのであるが、いよ〳〵里は遠ざかり、山は幾つもこえてしまつた。定めし妻も思ひしほれてゐるだらう。その門を見たい、その妻の樣子が見たい。ぺちやんこになつてしまへこの眼の先の山よ。

はじめの對句で荒涼たる石見國原を見せ、その無味な石見の國に只一つ

ある渡津をいひ、その渡津のやうに……………と都人には思遠いこの田舍人の間に見出したその妻を、渡津で象徴し、更に相睦びしことをこの津によせてくる美しい藻の相によつて表現したあたり、情趣の深さ極りなしといふべきであります。

末句の、靡けこの山の純眞無垢、童心無碍實に端倪すべからざるものがあります。

反歌

石見乃也　高角山之　木際從　我振袖乎　妹見都良武香

石見野や　高角山の　木のまより　わがふる袖を　妹見つらむか

なつかしい石見の國のその高角山の木の間をすかして、わが妻は、別を惜んでふつてゐる我が袖を見たらうか。

小竹之葉者　三山毛清爾　亂友　吾者妹思　別來禮婆

ささがはは　み山もさやに　さやげども　われはいもおもふ　わかれきぬれば

小竹の葉は、山中がさや〳〵となり動くほど、風に吹かれて騒いでゐるけれど、その中を行く我は、ぢつと妻のことを思ひつゞけてゐる。わかれて來た妻のことを……………。

一山が風でなり騒いでゐる笹生の中を、一人うなだれて、石のやうにだまつて、ぢつと考へこんで歩いて行く後姿が見えて來るではありませんか。

勿念跡　君者雖言　相時　何時跡知而加　吾不戀有牟

なおもひと　君はいへども　あはむ時　いつとしりてか　あがこひざらむ

さう思ひなやむなといはれるけれども、又何時おあひ出來るか知れませ

んので、親はしくてたまりません。

この歌は人麿の妻の依羅娘女が人麿と別れる時の歌であります。なぐさめられてもなぐさめきれず、あきらめてもあきらめきれない、かうした場合の眞情が、自らの調べになつて躍つてゐるのを見ませう。試みに「な思ひと君はいへども又いつか逢ふか知らねばいやこひしかり」とでも歌つてごらんなさい。意味は同じやうでも全く生彩のないものになつてしまふではありませんか。これはこの歌が本然の調べをしらべあげてゐるからであります。

柿本朝臣人麿妻死之後泣哀慟作歌二首
弁短歌

天飛也　輕路者　吾妹兒之　里爾思有者　懃　欲見騰　不
止行者　人目乎多見　眞根久往者　人應知見　狹根葛　後
毛將相等　大船之　思憑而　玉蜻　磐垣淵之　隱耳　戀管
在爾　度日乃　晩去之如　照月乃雲隱如　奧津藻之　名延
之妹者　黄葉乃　過伊去等玉梓之使乃言　梓弓　聲爾聞而
將言爲使　世武爲便不知爾　聲耳乎聞而有不得者　吾戀
千重之一隔毛　遣悶流　情毛有八等　吾妹之　不止出見之
輕市爾　吾立聞者　玉手次　畝火乃山爾　喧鳥之　音母
不所聞　玉桙道行人毛　獨谷似之不去者　爲便乎無見　妹
之名喚而　袖曾振鶴

あまとぶや　輕の路は　わぎもこが　里にしあれば　ね
もころに　見まくほしけど　やまず行かば　人目を多み

まねく行かば　人知りぬべみ　さねかづら　後もあはむと　大船の　思ひたのみて　たまかぎる　磐垣淵のかくりのみ　戀ひつつあるに　渡る日の　くれゆくがごと　照る月の　雲隱ること　奥つもの　なびきし妹は黄葉の　すぎていにしと　玉梓の　使の言へば　梓弓おとにききつつ　いはむすべ　せむすべしらに　おとのみを　聞きてありえねば　吾がこふる　千重のひとへもなぐさむる　心もありやと　吾妹子が　やまず出で見し輕の市に　吾が立ち聞けば　玉手次　うねびの山になく鳥の　こゑもきこえず　玉桙の　道行く人も　獨だに

似てし行かねば　せむすべをなみ　妹が名よびて　袖ぞふりつる

輕の路は我が妻の里であるから、眞實行つて見たいけれど、始終行くと人目につくし、ひつきりなしに行くと人に知られるので（遠慮して）どうせ後にはあへるのであるからと、すつかり安心して、ぢつと隱つて戀うてゐたのに、（思ひもかけず）日がくれるやうに、月が雲にかくれるやうに、我が妻はなくなつてしまつた。それをきいて悲しさやる方なくて、全く顚倒して了つた。しかしさうもして居られず。この使のいつた言を聞いただけでは氣がすまず、まだ生きてゐるやうだ、もし生きてたら………似てゐる人でも通つたら……この苦しい胸が少しは慰む事も出來るだらうと思つて、妻が始終出て見た、輕の市に行つて見ると、畝傍山は見えても妻の聲はない。人は大勢行くがその一人でも妻に似てゐる人はない。しようことなしに、妻の名をよんで袖を振つたのである。

おとのみをききてありえねば、……………の心情流露の美しさ。又終の………せむすべをなみ妹が名よびて袖ぞふりつる。これで如何にもせむすべがなくてした所作まで出て來てこの詩をより靈妙なものにしてゐます。妻の名をよんで生ける人を観て袖をふつてゐる古人（いにしへびと）の直情が尊くも亦美しく思はれてなりません。

○

秋山之　紅葉乎茂　迷流　妹乎將求　山道不知母
秋山の　もみぢを茂み　まごひぬる　妹を求めむ　山道知らずも

秋生の黄葉が茂くて迷うてゐる妻をさがし出したいが、どうも山道がわからない。何ともしようがない。
死を、一寸出て行つたもの、今に歸つて來るもののやうに觀じたのが、上古人の眞實であり、眞情であります。この心は今も殘つてゐて、親身の間の死別等の際にはまざ〳〵と露出して、兒をなくした親はかなり久しい間、その兒がかへつて來る足音をきいたり、呼びかける聲を聞いたりするのであります。

○

黄葉之　落去奈倍爾　玉梓之　使乎見者　相日所思
もみぢばの　ちりぬるなべに　玉梓の　使を見れば　あひし日おもほゆ

○

難波人　葦火燎屋之　酢四手雖有　己妻許曾　常目頰次吉
なには人　あしびたくやの　すしてあれど　おのがつまこそ　つねめづらしき

葦火をたく難波人の家の古び煤けたやうに、年老いたけれど、自分の妻はいつ見てもうれしいものである。

なにはびと………と明るく大様に歌ひ出してその若い妻が、あしびたくやのすしてあれど………でだん〱年をとつて貧しく老いて行く様をいだし、更に女さびした美を發見して、おのがつまこそつねめづらしき、とすつかり落付いてゐます。明、暗、明の三段の世界をひろげた歌、而して終りの明るい世界は底光の明であつて、尊い、ゆかしい美しさがあります。

我々の祖先に、こんなに落付いた、しつかりした、ものを観る眼のあいた、從つて深い愛に徹した人のあつたことは一つの誇であります。

（）

欲見者　雲井所見　愛　十羽能松原　少子等　率和出將見
琴酒者　國丹放嘗　別避者　宅仁離南　乾坤之　神志恨之

草枕　此羈之氣爾　妻應離哉
見さくれば　雲井に見ゆる　うるはしき　とばの松原
わらはども　いざわいで見む　ことさかば　國にさかな
む　ことさかば　家にさかなむ　天地の　神しうらめし
草枕　この旅のけに　妻さくべしや

欲は放で、放見者。琴酒者も別避者も共に特離で、死別のことであります。

この旅のけにはこの旅の日にで、この旅中に、旅の留守になどの意であります。

反歌

○

草枕　此羈之氣爾　妻放　家道思　生爲便無

草枕　このたびのけに　妻さかり　家路思ふに　生かかむ
すべなし

雜歌

麻等保久能　久毛爲爾　見由流　伊毛我敝爾　伊都可伊多
良武　安由賣安我古麻

まごほくの　雲井に見ゆる　いもがへに　いつかいたら
む　あゆめあがこま

天平八年丙子夏六月、遣使新羅國之時、使人等各悲別贈答。及海路之上
慟情陳思作、幷當所誦詠古歌一百四十五首

大船爾　伊母能流母能爾　安良麻勢波　羽具久美母知氏

由可麻之母能乎

大船に　いものるものに　あらませば　はぐくみもちて
行かましものを

○

君之由久　海邊乃　夜杼爾奇里多々婆　安我多知奈氣久
伊伎等之理麻勢

君が行く　うみべのやごに　霧たゝば　わがたちなげく
息と知りませ

○

大船乎　安流美爾伊太之　伊麻須君　都追牟許等奈久　波
也可敝里麻勢

大船を　荒海に出だし　います君　つつむことなく　早
や歸りませ

つつむは、つみ、とが、たゝり等の意、障りであります。つつむことな
くは、恙なく、無事であります。

○

眞幸而　伊毛我伊波伴伎　於伎津奈美　知敝爾多都等母
佐波里安良米也母

まさきくと　いもがいはば　おきつなみ　ちへにたつ
とも　さはりあらめやも

○

和可禮奈婆　宇良我奈之家武　安我許呂母　之多爾乎伎麻

勢多太爾安布麻弖爾

わかれなば　うら悲しけむ　吾が衣　下にをきませ　た
ゞにあふまでに

○

和伎母故我　之多爾毛伎余等　於久理多流　許呂母能比母
乎安禮等可米也母

わぎもこが　下にもきよと　おくりたる　衣の紐を　吾
とかめやも

○

和我由惠爾　於毛比奈夜勢曾　秋風能　布可武曾能都奇
安波牟母能由惠

わがゆゑに　思ひなやせそ　秋風の　ふかむその月　あはむものゆゑ

○

次嶺經　山背道乎　人都末乃　馬從行爾　己夫之　步從行者毎見　哭耳之所泣　曾許思爾　心之痛之垂乳根乃　母之形見跡　吾持有　眞十見鏡爾　蜻蛉領布　負幷持而　馬替吾背

つぎねふ　山城道を　人づまの　馬よりゆくにおのづましかちよりゆけば　見るごとに　ねのみしなかゆ　そこもふに心しいたし　たらちねの母の形見と　あがもたるまそみ鏡に　あきつひれ　おひなめもちて　馬かへわがせ

木原重る山城の道を、餘所の主人は馬で行くのに自分の主人は步いて行く、それを見る度に、泣けてならぬ。この事を考へると辛くてたまらない。(自分には)慈悲深い母が形見に下さつた、よい鏡がある、これに美しい領布を負價にして、よい馬を求めて下さい。

反歌

泉河　渡瀨深見　吾世古我　旅行衣　蒙沾鴨

泉河　わたりせふかみ　わがせこが　旅行衣　もぬらさむかも

泉河の渡りの瀨が深いので、そこをわたる吾が夫の旅衣の裳がぬれるだらうにね、

○清鏡　雖持吾者　記無　君之歩行　名積去見者
まそ鏡　もたれど吾は　しるしなし　君がかちより　なづみゆく見れば
君が歩で山河を難儀して行くのを見ると、つらくて、よい鏡をもつてゐても一寸もうれしくもない。

○馬替者　妹歩行將有　從惠八子　石者雖履　吾二行
馬かへば　妹かちならむ　よしゑやし　石はふむとも　あはふたりゆかむ
馬を求めて了へば自分はいゝが、妹は歩行しなくてはならぬ。一そのこと、石をふみ難儀をしても馬をかはずに、二人で共々に歩いて行かう。

簡素で、寶といふ樣なものの少かつた時代の婦人に、その鏡や、領布はどんなに大切なものであつたでせう。それを秘藏してゐた篋底からすつかり持ち出して、鏡のみならず、領布まで添へて、よりよい馬を我が夫の爲めに求めさせようとした婦人、かうした純情はずつと日本婦人の血の中に流れて來てゐるのです。

夫君は又夫君で、自分だけ馬で妻を歩かせることの心痛さをしつかりと知つて、「縱惠八子石者雖履吾二行」といひきつてゐます。この女にしてこの男あり。かゝる心情の二人が相扶け合つて天日の下を行く時、多難の世路自ら清風吹き、白露に沾ふのであります。

悲傷死妻歌一首幷短歌

天地之　神者無可禮也　愛　吾妻離流　光神　鳴波多嬬嬬
携手共將有等　念之爾　情違奴　將言爲便將作爲便不知

爾木綿手次　肩爾取掛　倭文幣乎　手爾取持而　勿離等
和禮波雖　巻而寢之　妹之手本者　雲爾多奈妣久
あめつちの　神はなかれや　うつくしきわがつまさかる
ひかる神てりはたをさめ　てたづさひ　共にあらむと
思ひしに　心たがひぬ　言はむすべ　せむすべしらに
ゆふたすき　かたにとりかけ　しづぬさを　手にとり
もちて　なさけそと　我はのめども　巻てねし　妹が袂
は　雲にたなびく

天地の神はないのでせうか。愛する我妻はなくなつてしまひました。美しいはた少女と手をとりかはして、世を渡らうと思ひましたのに、今はそれもあだとなりました。しようことなしにせめてこのまゝにゐてほし

いと、木綿襷を肩にかけ、色絲の幣をもつて祈つたけれど、とう〳〵、葬られて、その煙の中に妻の袂が、まざ〳〵と見へてかなしうございます。

反歌一首

寤爾等　念氏之可毛　夢耳爾　手本巻寢等　見者須便奈之
うつゝにと　思ひてしかも　ゆめのみに　袂まきぬと
見るはすべなし

沒くなつた妻を夢に見る、さめての心痛さにこの歎きが歌となつたのです。

○

吾背子之　振放見乍　將嘆　清月夜爾　雲莫田名引
わがせこが　ふりさけ見つつ　なげくらむ　清き月夜に

雲なたなびき

○

草枕　客去君乎　人目多　袖不振爲而　安萬田悔毛

草枕　旅行く君を　人目多み　そでふらずして　あまたくやしも

戀夫君歌一首

左耳通良布　君之三言等　玉梓乃　使毛不來者　憶病　吾身一曾　千磐破　神爾毛莫負　卜部座　龜毛莫燒曾　戀之久爾　痛吾身曾　伊知白苦　身爾染保里　村肝乃　心碎而將死命　爾波可爾成奴　今更君可吾乎喚　足千根乃　母之御事歟　百不足　八十乃衢爾　夕占爾毛　卜爾毛曾問應死吾之故

さにづらふ　君がみことと　玉梓の　使もこねば　思ひやむ　吾身一つぞ　ちはやぶる　神にもなおほせ　うらべする　龜もなやきそ　こひしくに　いたきわが身ぞ　いちじろく　身にしみとほり　むらぎもの　心碎けて　死なむ命　にはかになりぬ　今更に　君かあをよぶ　足千根の母のみことか　ももたらず八十のちまたに　夕けにも卜にもぞとふ　死ぬべきわがゆゑ

美しい君のたよりをもつて、なつかしい使が來ないので、ぢつと身一つでこがれなやむのであります。それを神のせいにすることはありません。卜部を招いて龜卜をして貰ふこともしないで下さい。私は戀しくて〳〵

病んでゐるのです。このこひしさがひどく身にしみとほつて、心も砕け氣もめいつて、もう死にさうです。

この際になつて、何にもならぬのに、私をよぶのは君でせうか、賑やかな町に出て夕占にとひ又卜に占ふのは母君でせうか、どうせ死んで行く我身であるのに。

反歌

卜部乎毛　八千乃衢毛　占雖問　君乎相見　多時不知毛

卜部をも　八十のちまたたも　占さへど　君を相見む　たどきしらずも

龜卜にも、町占にも占つて見たが、どうも君にあふすべがないのであるなあ。

この短歌がまづ詠出され、程經た後、死期になつてから長歌が歌はれたものと考へたい。それを蒐集した人がかういふ風に順よく並べ

たものでせう。

幸伊勢國時當麻麿大夫妻作歌一首

吾背子者　何處將行　己津物　隱之山乎　今日歟超良武

わがせこは　いづく行くらむ　おきつもの　なばりの山を　けふかこゆらむ

己は已として起と同じにおきとよんで沖つ藻の隱る、なばるは古語のかくるであります。奥つ藻、水底の藻は隱れてゐるからかやうに枕にしたのです。名張の山は伊賀の山で大和から伊勢へ行く時越える山です。

旅に出てゐる夫を家にゐる妻が、不斷に思ふ、今日はどこあたりを行くだらう、あの山はどう越えるだらう、あの河は無事にこしてくれゝばいゝがと…………この心がこの歌になつたのでありますそして二つのらむは思ひを遠くはせて、祈りかつうれひてゐる心の響であります。

昭和十年十二月十日印刷
昭和十年十二月二十四日發行

（非賣品）

編輯兼發行人　小林寛
群馬縣桐生市宮本町一三八〇番地

印刷人　住谷三平
群馬縣桐生市本町三丁目九六番地

印刷所　住谷印刷所
同所

發行所　群馬縣立桐生高等女學校　校友會

356
920

終